



イギリス発祥のスポーツであるフットボール。実はこのフットボールと「言語技術」という表現に強い繋がりがあられることはご存知でしょうか？そもそも「言語技術」って、何ですか？

- ❖ 今から約20年前のお話です。平成18年6月12日に文部科学省が「児童生徒の発達段階に応じた各教科等を横断した言語力の育成」するための会議では、「言語技術」という表現が何度も使われました。
- ❖ 発現者はつくば言語技術教育研究所の三森ゆりか委員で、同委員によると「言語技術」とは、①表現技術を扱う「言語技術」と、②（主に文学作品の）読解を扱う「テキストの読解」、その双方を指導するもので、従来の「国語」と、外国人への日本語教育の名称として用いられる「日本語」と区別する必要性から「言語技術」の名称を使用しているとしていました。
- ❖ この三森さんは、日本サッカー協会(JFA)のアカデミーコミュニケーションの講師をされており、サッカー番組「FOOT×BRAIN(テレビ東京)」にもゲスト出演されていました。なぜ、
- ❖ 歴代のサッカー日本代表チームが世界の壁を感じていた頃、「世界の舞台で試合中に使用する言葉、その『言葉の力』を高めることが、試合中のミスコミュニケーションをなくし、最終的には世界の壁を超える推進力になる。だから普段から使う言葉の力を高めよう」とフィジカル以外のテーマに力点を置き、その時に招いたのが、つくば言語技術教育研究所の所長を務める三森さんでした。
- ❖ 前述のテレビ番組によると三森さんは「言葉のスペシャリスト」として徹底した言葉にまつわる「世界基準の教育」を実践し、今日の日本サッカーの躍進を別の側面で支えた人物ともいわれています。
- ❖ また同番組では、元日本代表の名波浩さんも三森の指導を受けており、サッカーにおける「言葉の力」の重要性について、現役時代にイタリアで体験したことなども踏まえてお話をされていました(TVerでも観ることができます)。
- ❖ 確かに、子どもたちの使う日常的な言語には「先生、お茶」とだけ話すことがあります。この表現だけだと「先生、喉が渴いたのでこの場面で茶を飲んでもよいでしょうか」なのか、「先生、Aさんがお茶を忘れたのでコップで私のお茶を上げても良いですか？」などいろいろな解釈ができ、その真意をコミュニケーションの受け手に委ねてしまうだけでなく、意図が正確には伝わりません。
- ❖ 特に、人間関係がウエットな状況にあるここイギリスの日本語使用者は、あらゆる場面において日本国内よりもコミュニケーションの受け手も相手を忖度する傾向にあると考えられます。つまり「この場面ならお茶を飲みたいのだな」と、先回りして相手の意図を解釈し「お茶を飲んでも良いよ」と回答する。そして、何となくコミュニケーションが成立しているように感じます。
- ❖ しかし、このような相手依拠のコミュニケーション能力は今後、世界に羽ばたくロンドン日本人学校児童生徒に必要なコミュニケーション能力と言えるでしょうか？
- ❖ だからこそ日本語の「言語技術」の習得は重要であると考えています三森さんがある小学校1年の授業で、絵をもとに言語の分析力を高める練習を実施した時のことを最後に記しておきます。「…三森さんは、『こびとたちが台所でソーセージを作る様子が描かれた絵本』の一場面をスクリーンに映して見せた。「この絵の場所はどこ？」「どうしてそう思ったの？」と問いかけていくことで、描かれた場所や時間などを、根拠に基づいて推測し解釈できるようになる。同じ手法を使えば、文章を批判的、分析的に読めるようになるという。皆さんはどのように言語技術を高めていきますか？



【参考資料】

・TVer プラス

「言葉のプロが伝授！サッカーには欠かせない
コミュカや伝える力を養う方法」

<https://plus.tver.jp/news/102190/detail/>

・朝日新聞 EduA

「国語力アップには「型」があった！ 文章スキルを高める授業に密着」

<https://www.asahi.com/eduA/article/12821619>